様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９７９

研究課題名（和文）ヤップ出身者の脱領域的公共圏と文化的アイデンティティ

研究課題名（英文）Cultural Identity in Deteritorialized Public Sphere; a Yapese case study

研究代表者
柄木田　康之（Karakitia, Yasuyuki）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：８０２０４６５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヤップ文化を基盤とする脱領域的公共圏の構造の解明のため、移民のアソシエーションによる文化的祭礼の移民先における開催を現地調査によって検討した。検討から以下の特徴を指摘しうる。グアム島では指導者不在のため祭礼は中断され、ポンペイ島では政府からの補助が祭礼の開催を助け、ハワイ島では、祭礼は開催されないが、ヤップ離島出身者の独自の卒業式がヤップ離島文化の諸要素を提示している。またヤップ、グアム、ポンペイ、ハワイを跨ぐ、終末医療と葬儀のための相互扶助が存在し、これがヤップ本島と離島の民族的アイデンティティを喚起している。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of clarifying the structure of Yapese deterritorized public sphere, this research studies the cultural festivals Yapese migrant associations sponsor in their destinations of the migration, i.e. Guam, Pohnpei and the Big Island of Hawaii. In Guam, the festival has been terminated due to the lack of the leadership, while the assistances from Yap State government and the FSM government allow the festivals in Pohnpei. On the Big Island, the special graduation ceremonies for the Yap outer islander students display their cultural elements, even though the ceremony emphasizes their educational achievement rather than their culture. Besides the cultural festivals, the networks of the mutual assistances for the terminal medical services and monetized funeral practices connect Yap, Guam, Pohnpei and the Big Island, which reemphasize ethnic identities of the Yapese and the outer islanders.

研究分野：文化人類学

キーワード：移民　文化的アイデンティティ　ミクロネシア連邦　グアム　ハワイ　公共圏　相互扶助　エスニシティー

１．研究開始当初の背景

MIRAB 経済論に代表される従来のオセアニアの移民研究は，移民を母社会からの労働力の輸出，つまり現金収入源と捉え，これが母社会文化の維持・変容に与える影響を考察してきた(Bertram and Watters 1984)。申請者はこのような視点の限界をミクロネシアの移民研究で指摘している。ミクロネシアの国際移民からの仕送りは限定的であるものの，人々の往来は母村と移住地に跨るハイブリッドな生活世界を生み出しており，ヤップ出身者の教育，就労，結婚，出産，病，死といった生活サイクルは移民の存在抜きには語りえない(柄木田　2000)。

ミクロネシア連邦は 1986 年に米国と自由連合協定を締結し独立し，協定はミクロネシア連邦市民に米国へのビザ無し入国の権利を与えた。この結果 1986 年以降，ヤップ出身者には首都，州都での公務員としての雇用機会と，グアム，ハワイ，米国本土での非熟練労働者としての雇用機会が拡大した。一方，ヤップ州内での雇用機会は限られているため，州外・国外への移民が急激に拡大した。

自由連合協定の締結から 20 年を経て，首都を擁するポンペイ島，米国グアム島では移民のコミュニティが発展した。そしてグアム・ハワイでは，ミクロネシア移民に対して費やされる社会福祉費用の急増から，ホスト社会のミクロネシア移民への反発が高まった(GAO 2001)。これに対してミクロネシア移民はアソシエーションを形成し，自らの文化を表出することによって，ホスト社会との協調，社会的承認を模索している。

２．研究の目的

本研究は国土の極小性と資源の限定性によって政治経済的自立が困難な極小国家の市民が，伝統文化を資源としてアイデンティティ形成を行うことに注目し，グローバル化された世界を生きる極小国家の市民社会の可能性の検討を目指した。このため本研究は国境を越えて連携されるヤップ人の文化的アイデンティティ表出活動の民族誌的研究によって，ヤップ文化を基盤とする脱領域的公共圏の構造の解明を目的とした。脱領域的公共圏とは，領域国家を超えて生活情報が共有される市民の言説空間を意味し，国家を超えた往来と様々な通信手段によって維持されるヤップ出身者の生活世界は脱領域的な公共圏と特徴づけられる。

公共圏の研究ではしばしば身近な生活世界のイディオムを用いた国家の公共性に対抗する運動が研究の中心的課題となる。申請者は「ヤップ出身者の脱領域的公共圏の民族誌的研究」(一般研究 C, 2008-2010)においてヤップ州離島出身者のミクロネシア連邦ポンペイ島，米国グアム島におけるアソシエーションの現地調査に基づく比較研究を行った。この研究の結果，連邦政府職員を中心とするポンペイ島のヤップ人社会と非熟練労働者を中心とするグアム島のヤップ人社会には社会経済的差異が存在するものの，両者とも「ヤップ記念日(Yap Day)」を頂点とする文化的アイデンティティの表出する同郷アソシエーションを生み出していることが明らかとなった。文化的アイデンティの表出によって移民はホスト社会における社会的承認を求めているのである。

本研究はグアム社会における「ヤップの日」をめぐるアソシエーション活動の民族誌を中心課題と設定し，ポンペイ島、ハワイ島のヤップ出身者のアソシエーション活動との比較を計画した。

３．研究の方法

アソシエーションの最も重要な年間活動は３月から４月に開催される「ヤップ記念日」の開催であり，「ヤップ記念日」の費用捻出が募金活動の主要な目的である。「ヤップの日」の成功は母社会・ホスト社会の双方におけるアソシエーションの承認につながる。本研究は「ヤップ記念日」全体に対する個別のアソシエーション参加を明らかにすることで，ヤップ社会のグアムおける再生産と変容過程の解明を目指した。

グアム島に存在するアソシエーションには，ヤップ州全体，ヤップ本島個別地区，ヤップ州個別離島と，複数のアソシエーションが存在する。アソシエーション活動の集会の開催と募金活動を中心とし，活発なアソシエーションは募金のために時に NPO 法人登録を行う。募金活動は単なる寄付の集積だけではなく，洗車，清掃，昼食販売などの経済活動からの利益を集積し，アソシエーションに活動にあてるからである。

現在 NPO 法人登録されているのはヤップ州全体のアソシエーションのみである。しかし NPO 法人登録は全てのアソシエーションが目指しており，法人化を目指しアソシエーション規約等を制定している。本研究では，法人化登録を目指した移民アソシエーション活動の歴史を解明することで移民の自助組織の発展の評価を計画した。

またグアム島の市場経済と消費生活との出会いは，葬送慣行の貨幣経済化と拡大を生み出し，関係者の大きな負担となっている。一方これらの負担は，アソシエーション成員間の相互扶助や島嶼を跨ぐ親族ネットワークを強化している。本研究は親族間の相互扶助とアソシエーションの相互扶助を検討することで，移民にとっての相互扶助の民族としての意味と親族としての意味の検討を目指した。

調査はヤップ人アソシエーションを対象に上記の項目の情報を収集することによって，ホスト社会に包摂されつつ，ホスト社会に対抗し，国家を跨いで存在する脱領域的公

共圏においてヤップ文化を表出するヤップ人アソシエーションの特質の解明を目指した。

４．研究成果

研究の中心は研究代表者によるミクロネシア連邦ヤップ島、ポンペイ島、米国グアム島、ハワイ島におけるヤップ人アソシエーションの現地調査である。

研究代表者は、平成 23 年 8-9 月にミクロネシア連邦ヤップ島、ポンペイ島に 3 週間滞在し、在外ヤップ人アソシエーションの役員に対しポンペイ島における「ヤップ記念日」についての聞き取り調査を行うと同時に、アソシエーション成員の葬送関連の資料収集を行った。

平成 24 年 3-4 月には米国グアム島に 12 日間滞在しグアム島の「ヤップ記念日」の聞き取り調査、アソシエーション主催のイースター行事の参与観察を行った。

平成 24 年 10 月 23 日から 11 月４日までハワイ島ヒロ市に滞在し、ハワイ島往往ミクロネシア出身者の支援組織である Micronesian United -Big Island の年次集会の参与観察を行った。

平成 26 年 5 月 22-30 日に米国ハワイ州カイルア・コナ地区に滞在し在ハワイ島ヤップ州離島出身者アソシエーションによって開催された卒業記念祭の参与観察と聞き取り調査を行った。

最終的に、平成 27 年 3 月 7－11 日にミクロネシア連邦ヤップ島、12－18 日にポンペイ島、19－21 日に米国グアム島に滞在し、それぞれの地域の移民リーダーの聞き取りインタビューによって、ヤップ出身者の近況について確認した。

当初の目標では従来 3 月から 4 月の間にグアム島で開催されていた「ヤップ記念日」の参与観察を計画していたが，平成 24 年，25 年には「ヤップ記念日」がグアム島では開催されないことが確認された。このため在グアムヤップ本島アソシエーションの役員から「ヤップ記念日」が開催されていた時期の関連資料を収集し，それに基づき「ヤップ記念日」の詳細な聞き取り調査を行い，開催が中止にいたった経緯を確認した。

グアム島においては「ヤップ記念日」や季節の祝祭におけるアソシエーションの活動は縮小傾向にある。一方，医療サービスを求めて母社会から来訪する短期滞在者の受け入れ，また母社会に遺体を送り返すために複雑化した葬送慣行が，親族とアソシエーションの共同が顕著となる機会である。

調査期間中、グアム在住のヤップ離島出身者の死が，グアム島での仮葬儀と贈与交換，遺体のヤップ島への搬送，ヤップ島での仮葬儀と贈与交換，出身島嶼への遺体の搬送と葬儀と贈与交換という複雑な葬送慣行を生み出していることが確認された。またこのような複雑な葬送慣行は移民に限定されるのではなく母社会から医療サービスのために海外搬送された患者の遺体も同様に扱われる。さらに遺体をともなう葬送慣行に加えて，死が生じた場所にかかわらず，近親に死者が出た世帯は，その住居でカトリック教のロザリオの祈りの集会を 9 日間催する。これが広範な親族・同郷者結集の機会となっている。

これらの新たな葬送慣行に関する経済的負担に備えるため，ヤップ離島出身者はさまざまな相互扶助を行っており，在外ヤップ出身者アソシエーションも相互扶助の重要な担い手である。

ハワイ島ヒロ市の Micronesian United-Big Island(MUBI)はハワイ島在住ミクロネシアの複数の地域出身者によるアソシエーションである。ヤップ州離島ファイス島出身者が近年連続して会長を務めているが，MUBI 自体が複数のミクロネシア地域出身者のアソシエーションであるため，個別の地域の文化的アイデンティは必ずしも協調されない。活動の中心は社会的地位の低いミクロネシア出身者全体のエンパワメント，ハワイ島社会のミクロネシア出身者への偏見の排除であり，当面の活動としてミクロネシア出身者の漁撈慣行とハワイ島社会環境意識の違いに起因する対立の解消が模索されていた。

ハワイ島に居住するヤップ離島出身者は自らを Remathau（海の人々）と意識している。彼らの関心は、他のハワイ島ミクロネシア出身者と同じく、ミクロネシア出身者への偏見の排除であり、ヤップ離島出身者は，ハワイ島社会全体と同様に，自らも教育などの価値を共有していることを強調する。このため近年毎年，幼稚園から大学まで，全ての学校のヤップ州離島出身卒業生を顕彰する集会を 5 月末の休日に開催している。

2014 年の卒業生の顕彰は「Hataramal Waagei（未来を照らす）」と題され、戦没者追悼記念日の前日の日曜日、5 月 24 日に、ヤップ州ウルシー環礁出身者が経営者である造園会社施設内で開催された。集会はハワイ島在住のヤップ州離島出身者が中心となり、ハワイ島在住の学校卒業生ばかりではなく、オアフ島、マウイ島、米国本土の学校卒業生と関係者が参加し、ヤップ州離島出身者のリーダー、近隣の高等学校長、ハワイ大学ヒロ校職員等が招待され、2014 年度卒業生の学業を顕彰した。顕彰集会の翌日には同じ会場で共食、会計、踊り等、集会の運営に関する反省会が開催された。集会はハワイ島におけるヤップ州離島出身者の地位の向上を目指すものであったが、同時に伝統的航海術等のヤップ州離島の伝統文化を顕示する機会でもあった。

本研究はグアム島、ポンペイ島、ハワイ島の在外ヤップ人アソシエーションの民族誌的研究によってヤップ出身者の脱領域的公

共圏の構造の解明を目指した。
　グアム島とポンペイ島においてはアソシエーションの最も重要な活動は「ヤップ記念日」の開催であり，「ヤップ記念日」の費用捻出が募金活動の主要な目的であった。しかしながらグアム島では指導者の帰郷・不在から近年「ヤップ記念日」が開催されておらず、個別のアソシエーションがキリスト教の年中行事に小規模な集会を開催していることが確認された。
　ポンペイ島においては定期的に「ヤップ記念日」が開催されている。これにはミクロネシア連邦政府の職員が定期的にアソシエーションの役員となること、ヤップ州選出の連邦議会議員事務所が「ヤップ記念日」開催に一定の補助を提供していることが確認された。
　ハワイ島ではヤップ本島・離島を包括するアソシエーションの形成は見られない。しかしヤップ離島出身者は自らを Remathau（海の人々）と意識し、ミクロネシア出身者への偏見の排除するため、離島出身者が教育を重視していることを強調する。このため近年毎年，離島出身卒業生を顕彰する集会を開催しているが、この集会は同時に伝統的航海術等のヤップ州離島文化を顕示する機会でもあった。
　在外ヤップ出身者にとって近親者の終末医療と葬儀は，アソシエーション活動とは区別される重要な協同の機会である。このようなネットワークはヤップ島、グアム島、ポンペイ島、ハワイ島に跨って存在する。近親者の終末医療と新たな葬送慣行に関する経済的負担に備えるため，ヤップ出身者はさまざまな相互扶助を行っている。親族と同様に、在外ヤップ人アソシエーションも、相互扶助の重要な担い手である。終末医療のための島嶼を超えた諸活動は、葬儀の医療／貨幣経済化を反映しているのであるが、同時に、ヤップ出身者の文化的アイデンティティを強化している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

柄木田康之「エスニシティーと多文化主義を講義して-ミクロネシア・ヤップ出身者の在外アソシエーションを事例として」『多文化公共圏センター年報』4:70-78，2012。

〔学会発表〕（計　3 件）

柄木田康之　「ターミナルケアーの脱領域的公共圏－ヤップ離島出身者のグアム・ポンペイ移民の事例から」第 46 回日本文化人類学研究大会　2012 年 6 月 23-4 日　広島大学。

KARAKITA, Yasuyuki, “Deterritorialized funeral fund-raising as subaltern public sphere activities; a case of FSM migrants in Guam”, The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 5th -10th, August 2013, Manchester University.

KARAKITA, Yasuyuki, “Resisting monetization of land and life: The case of the outer islanders of Yap”, Inter-Congress, the International Union of Anthropological and Ethnological Societies, May 15-18, 2014, Makuhari, Chiba.

〔図書〕（計　1 件）

柄木田康之・須藤健一（編）『オセアニアと公共圏－フィールドワークから見た重層性』昭和堂　2012 年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　柄木田康之（KARAKITA YASUYUKI）
　宇都宮大学・国際学部・教授
　研究者番号：80204650

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

研究者番号：